

# ヴェーバー社会科学の方法（１）

## 「社会科学のおよび社会政策的認識の『客観性』」の考察

Weber's Method of Cultural Sciences, especially of Economics (1)

笠原俊彦

### まえがき

本誌の「執筆要領」により一論文当たりの字数が制限されているので、わたくしは、一つの論文を分割して投稿せざるをえない。この論文の最初の部分において、わたくしは、これに続く諸部分のそれをも含む目次を、とりあえず第２章まで記しておくこととする。第２章までは、四回に分けて記載されることになるであろう。

### 目次

#### 第１章 社会科学の方法に関する二つの疑問

- 1 科学的研究と政治的「傾向」
- 2 科学における実践批判と認識の客観性

#### 第２章 価値判断と科学的認識

- 1 経済学の出発と実践的「技術」
- 2 二つの自然法則における「存在」と「存在当為」との一致
- 3 歴史的相対主義、倫理的進化主義と経験的基礎をもつ「倫理的」科学
- 4 経験科学における価値判断への対応
- 5 理想と価値判断との科学的批判
  - (1) 所与の目的に対する手段の適合性の批判
  - (2) 手段の適合性の確認にもとづく目的の実践的意味の批判
  - (3) 随伴的結果の確認にもとづく意図的行為の批判
  - (4) 価値とこの基礎としての理念との確認
  - (5) 価値と理念との内的無矛盾性の批判

- 6 価値判断と科学的認識
  - (1) 実践的行動の解明と指示
  - (2) 科学的認識への世界観の作用
  - (3) 世界観と個人の尊厳
  - (4) 科学的研究における価値の伏在
  - (5) 理想からの演繹体系としての科学の誤謬
  - (6) 折衷主義の誤謬
  - (7) 価値判断と科学的認識 —— 科学者の責任 ——
- 7 科学的研究における価値の明示
  - (1) 科学的研究と価値の明示
  - (2) 価値の明示における思惟と意欲
- 8 科学的議論に対する解放性と自由性
  - (1) 科学的議論に対する解放性と自由性
  - (2) 「性格」および「性格」の「傾向」への転化の危険性

## 要 約

ヴェーバーは、そのいわゆる「客観性」論文の前段において、経験科学としての文化諸科学、とりわけ経済学が、実践に如何に対処しうるかを論じる。かれは、まず、経済学が国家の経済政策に対する処方箋を与える「技術」として生成したこと、その際、社会的事実を自然法の単なる反映と見る考え方から、存在と存在当為とが区別されず、経済学の課題は存在当為を示すことにありとされたこと、やがて、社会的事実が自然法の単なる反映ではなく独自の存在であることが認められるにつれ、社会的慣習としての道徳の内容を文化価値によって規定し、経験的基礎をもつ倫理的科学としての経済学を形成しようとする試みがなされるようになったこと、ここにおいても存在と存在当為とが区別されなかったことを明らかにする。そして、かれは、経験科学としての経済学が、存在ないし事実の認識のみをなしうるのであり、存在当でないし価値の判断をなしうるものではないことを主張する。ただし、かれによれば、このことは、経済学が、価値判断を対象としこれを批判することを否定するものではない。

## 第1章 社会科学の方法に関する二つの疑問

わたくしは、以下において、マックス・ヴェーバー (Max Weber) の論文「社会科学および社会政策的認識の『客観性』 (Die „Objektivi-

tät“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis)」<sup>1)</sup> を考察し、ここにヴェーバーが述べていることについてのわたくしの理解を示そうと思う<sup>2)</sup>。

ヴェーバーは、この論文において、まず、かれがこの論文を発表することとなった理由を明

らかにする。そして、かれは、次に、このこととの関連において、社会科学の方法に関する二つの疑問を提起する。そこで、われわれは、以下、ヴェーバーにしたがって、まず、かれがこの論文を発表することとなった理由を尋ねなければならない。

## 1 科学的研究と政治的「傾向」

ヴェーバーによれば、かれが最初にこの論文を発表した20世紀初め頃のドイツにおいては、「何らかの社会科学的雑誌、とりわけ社会政策に関する雑誌が刊行される場合、またはそれが新しい編集者に委ねられることになる場合に、まず提起されることとなっていた疑問（Frage）<sup>3)</sup>は、その雑誌がどのような『傾向（Tendenz）』をもつか、これであった。」（SS.146～147.）

ここにヴェーバーのいう「傾向」が、政治的傾向を意味することについては、われわれがとくに述べるまでもないであろう<sup>4)</sup>。

このようなヴェーバーの論述からわれわれが推測できることは、当時のドイツの社会科学的研究の多くが、政治という実践の場における政策について批判や提言をなし、このことによって、しばしば、何らかの政治的立場ないし傾向を示すものであったこと、あるいはむしろ、このような立場ないし傾向を積極的に主張するものでさえあったこと、これである。

実践に対する社会科学的研究のこのような関わりは、その具体的内容を別とすれば、もちろん、当時のドイツにのみ見受けられる現象だったわけではない。それは、のちにヴェーバー自身が明らかにするように、かれがとりわけ念頭に置いていた経済学においては、その生成の当初から見られたのであり、また、ヴェーバー後についても、われわれは、それが、いくつかの

曲折を経ながら、今日に至るまで、見られることを確認することができる。しかも、学問と実践との区別を曖昧なままに放置するだけでなく、この二つを意図的に混同しさえするアメリカの伝統的風潮が世界の各国に強力な影響を与えている今日においては、それは、経済学のみならず、社会科学的研究のさまざまな分野における他の諸々の専門学科についても、実に世界的ともいわれるべき規模において、見られる事態となっていることが注意されなければならない。

さて、1904年頃のドイツの上記のような状況において、『社会科学および社会政策のための雑誌』の編集者の一人となったヴェーバーは、この雑誌が「どのような傾向をもつか」という疑問に、何らかの形で答えておくことの必要を感じるようになった。そこで、かれは、かれら新しい編集者たちを代表し、この雑誌に自らの論文を発表して、この雑誌のある性格を明らかにし、このことによって上記の疑問に答えようとしたのである<sup>5)</sup>。

ただ、この場合、われわれが注意しなければならないことは、ヴェーバーがここで、自らの、そしてかれの共同編集者たちの、政治的傾向そのものを明らかにしようとしたわけではないこと、これである。むしろ、ヴェーバーは、この機会を利用して、いく分、原理的に疑問を設定することによって、かれらの雑誌の特質を述べようとした。すなわち、かれは、かれら編集者たちが考える意味での「社会科学的」研究が如何なるものであるかを問い、この一端を明らかにすることによって、社会科学的研究のために設けられたこの雑誌が、そもそも政治的立場と如何なる関係を有しうるか、を明らかにしようとしたのであり、このことによって、この雑誌の傾向についての上記疑問に答えようとしたの

である。(Vgl. S. 147.)

ここにヴェーバーが述べようとするものは、何よりも、まず、「社会科学的研究が政治的实践に如何に対処しうるか、これである。このようなヴェーバーの意図ゆえに、われわれは、かれのこの論文のうちに、かれの政治的傾向そのものではなく、かれが社会科学的研究をどのようなものと考え、このこととの関連において社会科学的研究と政治的实践との関係をどのように考えていたのかを、尋ねることができるのである。

しかも、この場合、われわれがとくに注意しなければならないことは、ヴェーバーが、かれのこの論文において、社会科学的研究と政治的实践との関係の考察のみならず、この考察のいわば前提ないし基礎として、科学的研究の「客観性」そのものの考察を重視し、これに大きく踏み込んでいることである。のちにも明らかにするように、この後者の考察こそは、かれのこの論文の主要部分をなすのである。

## 2 科学における実践批判と認識の客観性

さて、ヴェーバーによれば、かれが新たに編集に携わることになり、名称を『社会科学および社会政策のための雑誌』と改めたこの雑誌は、これがもともと創刊されたときからずっと、次のことをその目的として表明してきた。第一に、あらゆる国々の社会的諸情況 (gesellschaftliche Zustände)、したがって社会生活の事実 (Tatsachen des sozialen Lebens)<sup>6)</sup>、についての認識を拡大すること、そして、これと並んで、第二に、社会生活の实践的諸問題に関する判断 (Urteil über praktische Probleme) を修練すること、したがってまた、この判断において、立法的諸要因の批

判にまで及ぶ、社会政策的实践の批判をなすこと、これである。(Vgl. S. 147.)

このようなヴェーバーの論述から、われわれは、かれが新たに編集することとなったこの雑誌が、もともとの創刊以来、社会生活についての事実の科学的認識、これのみを意図するものではなく、これとともに、社会生活に関する政策的实践についての判断ないし社会政策的实践の批判、これをも意図するものであったことを、確認することができるであろう。そして、われわれには、ヴェーバーが、かれの共同編集者とともに、この雑誌の以上二つの目的を、かれらが新たにこの雑誌の編集を引き継いだのちにも、維持しようとしているように見えるのである。

しかしながら、このことは、この雑誌について、人びとに、次のような疑問を抱懐させることになるであろう。すなわち、この雑誌の上記二つの目的のうちの第二のものは、この雑誌が实践としての政治そのものと密接に関わろうとすることを表しているのであるが、このような実践への関わりは、この雑誌のもう一つの目的 (すなわち第一の目的) である科学的認識と、どのように関連するのかが、これである。この疑問こそは、ヴェーバーが、かれのこの論文において最初にとりあげるものであり、われわれが、われわれのこの論文の次章 (第2章) において検討しようとするものに他ならない。

さて、ヴェーバーは、ここで、予め、かれが最初にとりあげるこの疑問の意味を明らかにするために、以下のように論述を進める。

かれは、まず、かれらの「雑誌が、そもそもの創刊以来、専ら科学的雑誌であろうとする態度を堅く維持してきたこと、(そのために、——笠原) 科学的研究の諸手段 (Mitteln wissenschaftlicher Forschung) の

みを用いようとする意図を貫いてきた」（S. 147.）ことを確認する。

ヴェーバーがここにいう「科学的研究の諸手段」とは、もちろん実践のための諸手段から区別される科学的認識のための諸手段を意味すると思われるのであるが、それが何であるかはともかくとして、われわれは、かれらの雑誌における上記のような態度ないし意図を、何よりも、この雑誌の上述の第一の目的のうちに見出すことができるであろう。われわれは、この第一の目的こそが、まさに、この雑誌の基本的性格そのものを示しているのだ、と考えることができるのである。

しかしながら、かれらの雑誌は、この第一の目的、社会生活に関する諸事実についての科学的認識、これのみならず、これと並んで、第二の目的として、社会生活の実践的諸問題に関する判断ないし社会政策的実践の批判、をものとするものであった。

この第二の目的は、この雑誌の基本的性格を表す上記の第一の目的との関連において、人びとに、一つの疑問を提起させることになるであろう。この疑問とは、およそ科学的研究なるものは、その成果としての認識の客観性を求めざるをえず、また求めるのであるが、このように認識の客観性を求める科学的研究が、実践の批判とどのように関わりうるのか、より具体的にいえば、実践の批判とどのように整合性をもちうるのか、これである。

われわれは、政治的実践の批判が、しばしば、これをなすひとの政治的立場ないし理想によって相違し、それゆえに相互に対立しうるものであり、ときに政治的闘争を引き起こし、または少なくとも政治的闘争の一部となりうることを知っている。しかも、このように対立しうる

諸々の政治的立場ないし理想のうち、そのいずれが妥当性（Geltung）をもつかの判断には、科学的に客観性をもつ解答が見出されえず、それゆえに、このような諸々の理想のうちの特定のものにもとづいてなされる、実践に対する批判、これには、しばしば、客観性が見出されないのである<sup>7)</sup>。

ヴェーバーは、実践についての批判と客観性との関わりについてのこのような疑問を、次のように表現する。すなわち、かれらの雑誌のこの第二の目的は、そもそも、専ら科学的研究であろうとし、それゆえに科学的研究の手段のみを用いようとする態度を堅持してきた、この雑誌の基本的行き方、すなわち第一の目的と、原理的に整合性をもちうるのか、と。（Vgl. S. 147.）

この疑問を、ヴェーバーは、さらに、以下のようにも表現する。

「（この雑誌の第二の目的からすれば、笠原）この雑誌は、その紙面において、立法および行政に関する諸施策についての、またはそれらに対する実践的諸提案についての、判断をなす（beurteilen）ことができるとする。

だが、このことは、（科学的研究の手段のみを用いようとするこの雑誌の行き方からして

笠原）何を意味するのか。ここにいう判断（Urteile）の基礎となる諸規範（Normen）は、どのような性格をもつか。そのような判断をなす者がときに自ら表明する、または実践的提案をなす何らかの著述者がその提案の基礎に置いている、諸々の価値判断の妥当性（Geltung der Werturteile）は、どのような性格をもつか。このようなひとは、上記の判断をなし、または提案をなすに際して、どのような意味で、自らが科学的議論の土台のうえに立つ



ていると主張することができるのか。というのも、いずれにせよ、科学的認識の標識は、認識の成果が真理 (W a h l h e i t) として『客観的に』妥当すること (die ) objektive ( Geltung) に見出されざるをえないからである。」(S.147.)

このようなヴェーバーの論述について、われわれは、のちに、一方において、そこにいわゆる「立法および行政に関する諸施策、またはそれらに対する実践的諸提案について」の「判断」ないし批判の基礎となる「規範」のうち、少なくともあるものが、科学的批判の基準として科学の領域において示されうること、これに対し、他方において、そこにいわゆる「判断をなす者がときに自ら表明する、または実践的提案をなす何らかの著述者がその提案の基礎においている、諸々の価値判断の妥当性」が、科学の領域において示されうものではないことを知ることになるであろう<sup>8)</sup>。

だが、いずれにせよ、われわれは、以上から、ヴェーバーが、何らかの研究が科学的研究として認められうるための標識を、明確に、認識成果の真理としての客観的妥当性に求めていること、そして、このような考えにもとづくとき、かれがその編集する雑誌の「傾向」如何について提示する疑問が、第一に、社会生活に関する実践についての判断ないし批判が如何なる意味で科学的議論の土台のうえに在るといわれうるかであること、を知ることができるのである。

そして、また、ヴェーバーは、この第一の疑問との関連において、さらに、より基本的な第二の疑問を提示することになる。

かれはこの疑問を次のように表明する。

「文化生活に関する諸科学 (Wissenschaften vom Kulturleben) の領域において、『客観的に

有効な真理 (objektiv gültige Wahrheit)』が、そもそも、どのような意味で存在するのか。」(S. 147.)

この疑問が、より一般的ないし原理的な疑問であり、認識成果の「真理」としての客観的妥当性そのものについての疑問、科学の根幹をなす疑問、であることは、いうまでもない。この意味において、これは、すでに述べたように、第一の疑問のいわば前提をなすのである。

もっとも、この第二の疑問は、これが第一の疑問の前提をなすにもかかわらず、ヴェーバーにおいては、かれのこの論文の後半においてとりあげられることになる。ヴェーバーは、以下では、まず、以上二つの疑問のうち、第一の疑問についてのかれの考え方を明らかにし、かれらの雑誌の「傾向」の如何についての疑問に答えておこうとする。そこで、われわれは、次章において、この第一の疑問についてのヴェーバーの考え方を尋ねることとしよう<sup>9)</sup>。

## 第2章 価値判断と科学的認識

### 1 経済学の出発と実践的「技術」

ヴェーバーは、次のようにいう。

「周知のように、われわれの科学 (= 経済学 — 笠原) は、人間の諸々の文化制度 (Kulturinstitutionen) (= 人びとが価値を認めて形成する諸制度 笠原) および諸々の文化事象 (Kulturvorgänge) (= 人びとがその価値に従って展開する諸行動 笠原) を対象とするあらゆる科学 (= さきに述べられた「文化生活に関する諸科学」)。これらは、のちに「文化諸科学 (Kulturwissenschaften)」と総称される 笠原) が、おそらく政治史学を例外として、そう

であるように、歴史的には、まず、実践的諸観点から出発している。国家による特定の経済政策的諸施策について価値判断（Werturteile）をなすこと、これが、われわれの科学について最初に考えられた唯一の目的だったのである。われわれの科学は、医学のなかの諸々の臨床医学がそうであるのとほぼ同じ意味で、『技術（Technik）』であった。良く知られているように、この科学の地位は、その後、次第に変化してきたのであるが、しかし、それは、『存在するもの』の認識と『存在すべきもの』の認識とを原理的に区別することがなかったのである。」（S. 148.）

このようなヴェーバーの論述から、われわれは、文化諸科学の一つとしての経済学が経済政策の実践者に対する助言をなすものとして出発したことを知ることができる。

経済学は、あたかも臨床医学が、医療的困難としての病気に如何に対処して健康を回復させ、さらにはこれを増進させるか、を考察すると同様に、経済的状態の困難を如何に克服し、あるいは経済的状態を改善するか、を考察するものであった。そこでは、医学において、患者の健康の回復と増進とが、当然に価値あるものとして受け取られていると同様に、経済政策の実践者が直面する国家の何らかの経済的状態の困難の克服とその改善とが、当然に価値あるものとして受けとられていた。そして、そこでは、医学において、健康であることが、本来存在していることであると同時に存在すべきこと、と考えられると同様に、何らかの経済政策の実践者が有している国家の経済的状態についての理念は、本来存在しているものであると同時に存在すべきものである、と考えられた。経済学においては、このような理念ないし理想に

もとづいて、さまざまな施策について価値判断がなされたのである。

この意味において、ここでは、「存在すべきもの」から区別される「存在しているもの」の認識が問題とされることはなかった。そして、このように「存在すべきもの」から区別して「存在しているもの」を認識しようとはしない行き方は、その後、経済学の地位が、実践者に対する単なる助言者としての地位から、やがて相対的に独立の地位へと変化しても、変わることはなかったのである。

## 2 二つの自然法則における「存在」と「存在当為」との一致

ヴェーバーによれば、経済学において、このように、「存在すべきもの」の認識と「存在しているもの」ないし「存在するもの」の認識との区別を妨げるような作用した考え方には、当初、二つのものがあった。

その一つは、次のような考え方であった。——「存在するもの」としての経済的諸事象を支配しているのは、この経済的諸事象のうちに、変わることなく同一のものとして現れる自然諸法則（unabänderlich gleiche Naturgesetze）である。これら諸法則こそ、「存在するもの」としての経済的諸事象を必然的に生ぜしめるのであり、したがって、「存在せざるをえないもの」ないし「存在すべきもの」である。このようにして、経済的諸事象についていえば、「存在すべきもの」は、自然諸法則に従って必然的に同一のものとして繰り返し現れる「存在するもの」と同じである。（Vgl. S. 148.）

思うに、この考え方にしたがえば、何らかの経済的事象は、ただ、同一のものとして繰り返し現れる自然諸法則の必然的結果以外の何もの

でもなく、したがって、これを妨げようとする、あるいはこれを変えようとする人間の意図と行為とは、たとえこれらが存在したとしても、自らを貫徹する自然諸法則の前では無効とならざるをえず、無意味であらざるをえないであろう。このようにして、ひとは、これら自然法則から区別される、「存在するもの」としての経済的事象を、独自のものとして認識しようとはしないのだと、われわれは考えることができるのである。

ヴェーバーによれば、かれのいう「われわれの科学」すなわち経済学において「存在するもの」の認識と「存在するべきもの」の認識との区別を妨げるよう作用したもののもう一つは、一つの一義的な発展の原理 (ein eindeutiges Entwicklungsprinzip) が経済的事象を支配しており、それゆえに「存在するべきもの」は、この原理ないし法則にしたがって必然的ないし不可避免的に生成するものとしての「存在するもの」と一致する、という考え方である。(Vgl. S. 148.)

われわれの見るところ、ヴェーバーは、ここでは、繰り返し現実として再現される自然諸法則に従う経済的事象ではなく、ただ一回限りの独特の経過として実現される一つの自然法則に従う経済的事象を念頭において論述している。

このような経済的事象の経過は、一つの明確な発展の法則という自然法則にもとづいて必然的に生成する事象の経過として考えられるのであり、それゆえに、われわれは、この考え方においても、このような法則に従う事象の経過を妨げようとする、またはこれを変えようとする、人間の意図と行為とが、無効とならざるをえず、したがって無意味と考えられざるをえない、ということができるであろう。このようにして、

ここにおいても、この自然法則すなわち歴史的経過の法則とは異なる独特の事実としての経済的事象の考察は、なされることがないのである。

われわれは、自然法則についての以上二つの考え方のうちの第一のものの前身を、繰り返し再現される必然的生起の法則という自然科学において一般的な考え方のうちに最も明瞭に見ることができるであろう。第一の考え方は、自然科学における繰り返し再現される法則というこの考え方を、経済学に移入したものである。われわれは、この考え方の一つの結実を、例えば、経済的事象は常に一つの安定した状態に回帰しようとする、という経済学における均衡理論のうちに見ることができる。

そして、われわれは、第二の考え方の例を、何よりも、人間の歴史は経済によって規定され、しかもここにおける経済的事象は、一回限りの生起の法則に従って必然的に経過する、という史的唯物論のうちに見ることができる。われわれは、それが、やはり、事象のすべてを必然的な法則の結果として見る当時の自然科学の考え方の、経済学への移入によるものであることを看過してはならないであろう。自然科学の必然的生起の法則という観念は、第一の考え方においては、自然科学に一般的な、繰り返し再現される生起の法則という観念そのままの姿で、経済的事象の理解に用いられたのであるが、第二の考え方においては、一回限りの生起ないし発展の法則という特異な姿に変形されて、経済的事象の理解に用いられたのである。

われわれは、これらの考え方が、いずれも、そこに「法則」として想定されているものとは異なる事実、この意味での事実そのもの、を認識しようとする態度を妨げ、これを排除する作用をもつことに注意しなければならない。もし



て、このことから、それらは、「法則とされているもの」を事実によって批判し、そこに言う「法則なるもの」が、はたして法則としての性質をもつか否かを検討する、という経験科学への途を閉ざし、ついには、その「法則なるもの」を絶対視し、盲信する行き方をさえ、ひとにとらせることとなる、と思われるのである。

いずれにせよ、以上二つの考え方においては、事象ないし事実、法則に従って必然的に生起する、とされる。ここでは、かつて存在したものの、そして現在存在しているものは、法則に従って必然的に存在するべきものとして生起したのであり、また、これから存在することになるものも、法則に従って必然的に存在するべきものとして生起することになる、とされる。

このようにして、以上二つの考え方においては、存在したものの、存在しているもの、または存在することになるもの、総じて「存在するもの」ないし存在（Sein）は、「存在するべきもの」ないし存在当為（Seinsollen）と異なるものではない。この二つは区別されえないのである。ヴェーバーによれば、このような考え方が、経済学の当初において、「存在するもの」と「存在するべきもの」とを原理的に区別することを妨げるよう作用したのである。

### 3 歴史的相対主義、倫理的進化主義と経験的基礎をもつ「倫理的」科学

ところで、ヴェーバーによれば、経済学において「存在するもの」と「存在するべきもの」との区別を妨げるよう作用したものは、以上の二つだけではない。

かれは、次のようにいう。

「その後、歴史の意味（der historische Sinn）が意識されるようになり、これに伴って、われ

われの科学（＝経済学——笠原）においては、倫理的進化主義（ethischer Evolutionismus）と歴史的相対主義（historischer Relativismus）との一つの結合が支配的となった。そして、このことによって、倫理的諸規範からその形式的性格を取り去り、諸々の文化価値の全体を『道徳的慣習（das Sittliche）』の領域に引き入れてこの道徳的慣習の内容を規定し、このようにして、国民経済学（die Nationalökonomie）（＝経済学——笠原）を、経験的基礎をもつ一つの『倫理的科学』（eine ethische Wissenschaft）という威厳（Dignität）あるものにまで高めようとする試みがなされることになったのである。」（S. 148.）

このようなヴェーバーの論述を、われわれは、以下のように理解することができるであろう。われわれのこの理解を、われわれは、まず、歴史の意味の意識について、次に歴史的相対主義について、さらに倫理的進化主義について、順に述べることにより、説明することとしたい。

われわれが理解しうる限りでは、ヨーロッパの中世においては、人間の歴史は、絶対者としての神によって定められているものと考えられた。それゆえに、それは、神の定めに従い、この定め通りに経過する、と考えられたのである。歴史が絶対者としての神の定め通りに経過するというこの考え方を、われわれは、ここで、歴史的絶対主義（historischer Absolutismus）と呼ぶことができるであろう。

ところで、自然科学の生成とともに、人びとは、歴史を、自然科学における「法則」という観念の作用を受けた二つの考え方によって見ることとなった。すなわち、かれらは、歴史を、第一に、われわれが以上に述べた「繰り返して再現される諸法則」の現れ、または第二に、

「一つの一時的な歴史的経過の法則」の現れ、として考えることとなったのである。ここでは、少なくとも当初は、人間の歴史は、あたかも神が定められたものとも見える（そして実際に、しばしばそのように考えられていた）自然法則の通りに経過するものとして理解された。このような考え方は、やがて、神による定めという観念を薄れさせていくのであるが、しかし、それにもかかわらず、歴史の経過が絶対的な自然法則にもとづくものだとする観念は、これを維持したのである。われわれは、このような考え方を、歴史的絶対主義として理解することができるであろう。

いずれにせよ、以上においては、人間の歴史は、神の定めあるいは自然法則と別個に存在するものとして考えられたわけではなく、それゆえに、それ自体の独自の意味をもつものとして考えられたわけではない。

だが、やがて、人びとは、人間の歴史が神の定めないし自然法則の単なる現れだとする見方から、次第に解放されることになった。人びとは、歴史を、神の定め、自然法則ないし自然科学的法則に単純に従うものとしてではなく、それ自体の生成ないし個性的生成をも含むものとして、さらには、個性的生成そのものとして見るようになった。ここでは、人間の歴史は、神の定め、さらには自然科学的法則の、単なる反映ではなく、それ自体のうちにさまざまな生起の要因を含む独特の事象の経過であり、これらの要因のうちには、とりわけ人間の主体的行動が含まれる、と考えられることとなった。そして、それゆえに、歴史は、それ自体として独特の意味をもつものとして考えられることとなったのである。

これが、ヴェーバーのいう歴史の意味の意識

であろう。そして、歴史についてのこのような意味の意識は、一方において、歴史が特定の定めや法則によって絶対的に支配されるという歴史的絶対主義ではなく、歴史が人間の主体的要因を含むさまざまな要因によって作用され、しかも歴史の経過は、さまざまな要因のその時々々の状況に応じた作用の関連のあり方によって異なるものとなりうる、という歴史的相対主義を含意するであろう。

歴史についての上記のような意味づけは、また、他方において、中世のキリスト教社会を支配した、倫理の普遍的体系、神によって定められた永遠・不変の絶対的倫理としての戒律ないし律法の論理的演繹体系、形式的体系、という考え方に代わって、人間の倫理とは、人間の歴史とともにその生活のうちに形成され変化し発展してきた現実としての倫理、すなわち習わしとしての倫理ないし道徳なのだ、とする考え方、すなわち倫理的進化主義をも生み出しえたのだと考えられうる。

以上のような歴史的相対主義と倫理的進化主義とが結びつくとき、一つの文化科学としての経済学においては、人びとの生活のうちに経験的に存在するものとしての諸々の文化価値がとりあげられ、これらについてその道徳的意味を問い、このようにして、「道徳的なもの」の内容を文化価値によって規定する試みがなされることになった、と考えられうるであろう。

このような試みをなす経済学は、これが文化価値という経験的存在によって道徳という経験存在としての倫理の内容を規定しようとするものであるがゆえに、経験的基礎をもつ「倫理的科学」として理解されることになる。ここでは、人びとの生活のうちに存在するものとしての諸々の文化価値は、人びとによって価値を認められ、

存在すべきものとして形成されたものであり、それゆえに、それは、存在すべきものとしての価値を表す道德、現実的ないし慣習的倫理、の内容をなす、と考えられたであろう。このようにして、ここでは、存在するものとしての文化価値は、人びとによって存在するべきものとして理解される道德の内容をなすことにより、存在するべきものとしての正当性を与えられることになるとともに、このことによって、存在するべきものとしての意味をもつ道德に、存在としての実体を与えることになったと考えられる。このようにして、ここにおいても、「存在」が「存在当為」から区別して考えられることはなかったのである。

ところで、この場合、経済学は、以上のように、道德的なものの内容を文化価値によって規定することによって、自らを、経験的基礎をもつ一つの「倫理的科学」という威厳あるものにまで高めようとしたのであるが、ヴェーバーによれば、ここにいわゆる「威厳」は、かつての倫理的「命令」が有していた「威厳」とは比べるべくもないものであった。

ヴェーバーはいう。

— このように、あらゆる文化価値ないし文化理想（Kulturideale）に「道德」のスタンプを押し、このことによって道德の内容を規定することは、この道德から、かつての倫理的「命令」が有していた固有の威厳（die spezifische Dignität der ethischen Imperative）を失わせた。（Vgl. S. 148.）

われわれは、そもそも、道德が人間の日々の生活のうちに形成される慣習であるにすぎず、したがって、かつての倫理が有していたような神の命令の絶対的威厳を有するものではないことに注意するべきであろう。この点においては、

人間がその生活において形成する文化価値ないし文化理想も同様であり、この文化理想によって道德の内容を規定しても、（または、同じことだが、文化理想に道德のスタンプを押しても、）このことによって、道德が、神の命令におけるような絶対的威厳を有しうるわけではない。道德が有しうるのは、せいぜい、経験世界としての人間の社会における相対的威厳であるにすぎない。

しかも、ヴェーバーによれば、以上のように「考えられうる限りすべての文化理想に『道德』のスタンプを押しことによって、（中略——笠原）この文化理想の妥当性が、何がしかの『客観性』を得ることもなかった。」（S. 148.）

すなわち、この文化理想が「存在するべきもの」として主張される際の、この主張の妥当性には、この文化理想に道德の威厳を与えても、このことによって「客観性」が与えられることはなかったのである。

ヴェーバーの論述のこの「客観性」に関わる部分について、われわれは、次のように考えることができるであろう。

第一に、「客観性」を、神の命令のような形而上学的意味において理解する場合には、これとは異なる形似下学的性質をもつにすぎない人間の習わしとしての道德、人間社会における慣習としての命令の妥当性は、「客観性」を有しない。したがって、人間がその生活において形成した文化価値ないし文化理想に、このような「道德」のスタンプを押しても、このことによって文化理想の妥当性に上記のような「客観性」が与えられうるわけではない。文化理想に「道德」のスタンプを押す手続きこれ自体は、それに、神による命令としての「倫理」のスタンプを押す手続きに類似しているのであるが、しか

し、このような手続きの類似性は、人間の道徳が神の命令としての倫理ではない以上、文化理想の妥当性に、上記の意味での「客観性」、形而上学的「客観性」、を与えるわけでは決していないのである。

第二に、「客観性」の意味を、経験科学において問題とされる「経験的事実に即していること」すなわち即事性 (Sachlichkeit) ないし経験科学的「客観性」の意味に理解する場合にも、人間の文化価値ないし文化理想に「道徳」のスタンプを押すことは、その妥当性に「客観性」を与えるものではない。なぜなら、価値の事実としての「存在」、すなわち何らかの価値が人びとによって有<sub>レ</sub>されているということ、このことと、この価値の「妥当性」、すなわちこの価値が人びとによって有<sub>レ</sub>されるべきこととは、別個のことがらであり、経験科学は、価値の「存在」の如何についての「客観性」を問題とすることはできるけれども、価値の「妥当性」ないし「存在当為」の如何についての客観性を問題にすることができないからである。

— われわれには、ヴェーバーの論述は、「客観性」についての以上二つの意味のうち、この後者を念頭に置いてなされているように思われる。—

思うに、「道徳」は、人びとが「存在するべきもの」と考え形成することによって存在することとなる社会的慣習であり、この意味での「存在」すなわち経験的存在の一つである。したがって、経験的存在としての何らかの文化理想に「道徳」のスタンプを押すことは、ある一つの「存在」に、他のもう一つの「存在」のスタンプを押すことを意味するだけ、換言すれば、せいぜい、ある「存在」が他の「存在」の性質をもつことがいわれるだけ、であって、ある

「存在」に、これが存在するべきであるということの、すなわち「存在当為」の、スタンプを押すことを意味するわけでは決していない。

ヴェーバーによれば、「存在するもの」ないし「存在」、すなわち経験的事実、の一つである文化価値ないし文化理想に対して、「存在するべきもの」という意味内容をもつもう一つの「存在」、すなわち同じく経験的事実、である道徳のスタンプを押す行き方は、「存在するもの」と「存在するべきもの」とを明確に区別せず、むしろ、これを曖昧にする。このことによって、それは、道徳のスタンプを押された文化理想の妥当性が客観性をもつか否かの問題を原理的に議論することを等閑にしうるし、また等閑にすることにならざるをえないのである。(Vgl. S. 148.)

このようにして、ヴェーバーによれば、かれがその論文を書いていた当時、すなわちかれのいう「今日」、に至ってもなお、次のような不明瞭な見解が、消え去ることなく残っており、とりわけ実践に携わる人びとの間に広く行き渡っていた。経済学ないし国民経済学は、何らかの特定の「経済的世界観 (wirtschaftliche Weltanschauung)」から価値判断 (Werturteile) を生み出すものであり、また生み出すべきものである、という見解が、これである。(Vgl. S. 149.)

ここにいう「経済的世界観」が、何らかの人びとがもつ経済についての道徳的な文化理想であり、しかもその人びとにとっての基本的なそれであること、そして、ここにいう価値判断が、このような文化理想にもとづいてなされる、具体的なものごとに対する価値の判断であり、ここでは、これが、とりわけ何らかの経済的施策の批判ないし提案のうちに現れるものであるこ



とは、われわれがとくにいうまでもないであろう。

ヴェーバーは、のちに、価値判断が理念 (Idee) にもとづき、これから導き出されることを述べるのであるが、上記の「経済的世界観」は、このような理念の一つに他ならない。ヴェーバーは、ここでは、当時の経済学において、人びとが自らの基本的な道徳的文化理想としての「経済的世界観」にもとづいて何らかの経済的施策の価値を判断していたこと、しかも、人びとが、このような価値判断をなすことこそが国民経済学の課題だ、と考えていたことを明らかにしているのである。

#### 4 経験科学における価値判断への対応

ヴェーバーがその論文「社会科学のおよび社会政策的認識の客観性」を著した当時の文化諸科学、とりわけ経済学の情況は、以上の通りであった。

このような情況において、ヴェーバーは、かれおよびかれの共同編集者たちが新たに編集することとなった雑誌が、一つの経験的専門学科、一つの経験科学 (eine empirische Fachdisziplin, eine Erfahrungswissenschaft)、としての経済学ないし国民経済学を代表しようとする意図をもつことを明らかにする。そして、かれは、このことからして、かれらのこの雑誌が、特定の「経済的世界観」にもとづいて価値判断を生み出すべきだとする見解を根本的に拒否することを、まず最初に明らかにしておこうとする。なぜなら、かれおよびかれの共同編集者たちが考えるところでは、ひとが、自らをそして他人を拘束する諸々の規範や諸々の理想 (bindende Normen und Ideale) (= 特定の経済的世界観ないし理念 — 笠原) を見つけ出し、これにも

とづいて実践のための処方箋 (Rezepte) を導き出そうとする (= 何らかの具体的施策についての価値判断をなそうとする — 笠原) ことは、決して経験科学の課題ではありえないからである。(Vgl. S. 149.)

だが、ヴェーバーのこのような主張は、これだけでは、いまだ、その意味するところが必ずしも明らかではないであろう。そこで、ヴェーバーは、以下において、かれのこのような主張の意味を明らかにしようとする。

ヴェーバーがまず注意することは、経験科学は特定の世界観ないし理念にもとづいて価値判断をなすべきだという見解を拒否する、というかれの主張が、「価値判断が結局は特定の諸理想にもとづいており、したがって『主観的』起源をもつがゆえに、そもそも客観性を基準とする科学的議論のうちに入らないことを意味するものでは決してないこと」(S. 147.)、これである。

いうまでもなく、ここで、ヴェーバーは、価値判断が結局は特定の諸理想にもとづいていること、したがってそれが「主観的」起源をもつこと、を否定しようとしているわけではない。かれは、これもまたいうまでもないことながら、科学的議論が客観性を基準とすることを否定しようとしているわけでは、もちろんない。かれがここで否定しようとしているのは、価値判断が特定の諸理想にもとづいており「主観的」起源をもつことを理由として、それが、「科学的議論のうちに入らない」と考えること、これである。

ここにヴェーバーのいう「科学的議論のうちに価値判断が入らない」とは、何よりも、「科学的議論が価値判断をとり扱わない」、より正確にいえば、「価値判断が科学的議論の対象と



「はならない」、あるいは「科学的議論が、価値判断をその対象としてとり扱うことにはならない」、という意味である。ヴェーバーは、まさに、このような見解に対して、価値判断が科学的議論の対象となることを主張するのである<sup>10)</sup>。

ヴェーバーによれば、かれらの雑誌は、その実践においても、その目的においても、一貫して科学的批判をなそうとするのであり、したがって、このような批判を諸々の価値判断に対して停止しようとはしない。それは、科学的批判を、諸々の理想および価値判断に対してもなそうとする。(Vgl. S. 149.)

さて、ヴェーバーの以上のような考えからすれば、ここでは、そもそも、諸々の理想および諸々の価値判断に対する科学的批判とは何を意味し何を目的とするのか、が問われなければならないことになるであろう。そこで、かれは、このことについて、以下、少しばかり立ち入った考察をなそうとする。そして、ここにヴェーバーが展開するものは、かれがのちに「技術的批判 (technische Kritik)」と呼ぶことになる「諸々の理想および諸々の価値判断の科学的批判」、これである。(Vgl. S. 149.)

## 註

- 1) マリアンネ・ヴェーバー (Marianne Weber) によれば、この論文は、1904年、『社会科学および社会政策のための雑誌 (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik)』がヴェルナー・ゾムバルト (Werner Sombart)、マックス・ヴェーバー そしてエドガー・ヤッフエ (Edgar Jaffé) によって新しく編集されることになったときに、この雑誌に初めて発

表された。

それは、のちに、マックス・ヴェーバーの『科学論論文集 (Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre)』に収められたのであり、わたくしの以下の考察は、この論文集第3版所収のものに依っている。(Vgl. Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 3. Aufl., J.C.B.Mohr, Paul Siebeck, Tübingen, 1968. S. 146 10.)

なお、わたくしは、以下、注においては、ヴェーバーのこの論文を Max Weber, „Objektivität.“ と略記し、本文中の引用文においては、このページ数のみを示すこととする。

- 2) わたくしのこの論文の目次は、ヴェーバーの上記論文についてのわたくしの理解を述べるために作成されたものであり、したがって、わたくしが作成したものである。

なお、ヴェーバーの上記『科学論論文集』には、その目次の、に、ヴェーバーの上記論文について、次のような細目次が付けられている。この細目次は、ヴェーバーの論文の本体には付けられていないものである。わたくしは、これを、以下のように、そのままに訳しておくこととする。(訳文中の数字は、上記論文集のページ数を示す。)

社会科学および社会政策的認識の「客観性」 .....146 - 214

序言 146. . 諸々の理想と諸々の価値判断との科学的批判の意味 148. 経験的知識と価値判断との原理的区分 155. . 文化科学的認識関心の構成的意義 161. 文化科学における理論的考察方法と歴史的考察方法との関係 187. 理想型的概念形成

の論理構造 190. 経験的社会認識の「客観性」の意味；文化理念と文化科学的関心との変容可能性 212.

- 3) ヴェーバーは、Frage と Problem とを使い分けている。わたくしは、前者を「疑問」、後者を「問題」と訳することにする。かれにおいては、Frage は、漠然とした大きな問題、Problem は、Frage から発する、より具体的な小さな問題を意味するものとして用いられているように思われる。
- 4) 当時のドイツのこのような事情については、例えば、次を参照のこと。  
大河内一男著 『独逸社会政策思想史』 上・下巻、大河内一男著作集、青林書院新社、1968年
- 5) ただし、ヴェーバーによれば、この論文は、そのすべてがかれら編集者たちの考え方を代表しているわけではない。かれによれば、かれら編集者たちの考え方を代表しているのは、かれのこの論文の第 1 節（わたくしが、わたくしのこの論文の第 2 章にとりあげるもの）のみであり、第 2 節（わたくしが、わたくしのこの論文の第 3 章にとりあげるもの）は、ヴェーバー一人の考えを示している。（Vgl. Max Weber „Objektivität.“ S. 146.<sub>11</sub>.)
- 6) ここでは、ヴェーバーは、明らかに、gesellschaftlich という言葉と sozial という言葉とを区別していない。
- 7) ここに「しばしば」と述べたのは、実践に対するこのような批判についても、その一部については、「客観性」を求める科学的批判が可能だからである。このことは、のちに、ヴェーバーが「技術的批判」として明らかにするものである。
- 8) 前者の科学的批判の基準としてわれわれ

が念頭に置いているものは、われわれが後述する「技術的批判」に示されるもののことである。

- 9) この第一の疑問についてのヴェーバーの考え方は、われわれがさきに述べたように、かれら共同編集者に共通の考え方である。
- 10) 科学的議論と価値判断との関係については、のちにも述べるように、対象を科学的に考察する場合の観点としての価値の選択における価値判断、あるいは、そもそも問題の設定における価値判断、が問題となるのであるが、このことについては、ヴェーバーは、ここでは、とくに述べていない。